大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

蘇軾の妻妾に対する観念

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 雪云 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004371

蘇軾の妻妾に対する観念

林　雪　云

前書き

宋代の才子蘇軾（一〇三七～一一〇一）、字は子瞻、号は東坡居士、彼は詩・詞・散文に巧みなだけでなく、書画にも秀で、欧陽修・曾鞏の後を継け、北宋文学界のリーダーとなった。彼は中国文学史上、著名な文学者、書家、画家であり、知らぬ人とてない人物と言えるだろう。蘇軾やその作品を研究する国内外の研究者は数知れず、絶え間なく研究成果が発表されている。蘇軾の詩・詞・散文の源流や、文学の表現の方法論に着目した研究論文はすでに数多く存在しているが、蘇軾の妻妾観については論及する人はあまり多くない。

蘇軾の文学は森羅万象を含んでいる。そのかなりな分量が女性のために費やされていること、女性の中にはもちろんかれの妻妾達が含まれていることを我々は無視できない。そうであるならば、蘇軾はいかなる角度から妻妾たちのイメージを再現しているのだろうか？蘇軾に描かれた妻妾たちはどのような日々を送っていたのか？蘇軾の妻妾たちと、同時代の文人の妻妾たちとの間にはどのような差異があったのか？蘇軾が描いた妻妾たちのイメージは、同時代の文人が描いた妻妾たちのイメージと比較してより個性的で、より精彩に富んでいたのであろうか？本論文において、蘇軾が妻妾を題材とした詩・詞・墓誌銘を分析することにより、蘇軾の妻妾に対する愛情の性質、結婚観を探究し、彼の妻妾観を明らかにしていきたいと考えている。

第一節　亡き妻妾を追悼、回想した詩・詞・散文

蘇軾はその生涯において、生活の伴侶として二人の妻と数人の妾を持った。妻はともかくとして、彼が何人の妾を持ったかについては確定する材料に欠けている。はっきりしているのは、「二人の妻」である正妻王弗、後添いの王閏之、妾の中では彼が寵愛した王朝雲、この三人だけである。偶然にしては出来すぎているが、三人とも王姓であり、残念なことに三人とも彼に先立ってなくなっている。王姓の女性は初めから非運の生れ

つきであったのか、あるいは波乱に満ちた生涯を送った蘇軾が、王姓の女性たちに幸せな生活をもたらすことができなかったのか、彼女たちはその死後、蘇軾に無限の追憶と悔恨を残したのであった。蘇軾はこの尽きせぬ思いを筆端に載せたのである。蘇軾の数多くの作品の中で、特に彼のロマンチックな詞の中で、どの作品が亡き妻妾の誰を対象に作られたのかを正確に考証する術はない。しかし以下に引用する作品のうち、「南郷子・集句」「南郷子・有感」（これらの二首は関連する論考の考証を借りて、亡き妻妾のために作られたと判断した）を除けば、蘇軾が亡き妻妾を悼み、回想した作品であると断言できる。

蘇軾の正妻王弗は、至和元年（一〇五四年）、十六歳の時に蘇軾に嫁ぎ、一〇五九年、長子蘇邁を生んだ。文字が読め、礼儀作法に通じ、内助の功を称えられる王弗は蘇軾と十一年の歳月を過ごした後、治平二年（一〇六五年）五月、不幸にして病没した。蘇軾が正妻王弗のために詠んだ詞には、千古第一の悼亡詞と称せられる「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」、「南郷子・集句」そして墓誌銘としては「亡妻王氏墓誌銘」がある。

二人目の妻王閏之は、正妻の従妹であり、王弗が病没して三年後、一〇六八年に蘇軾に嫁した。当時王閏之が二十一歳、蘇軾が三十三歳であった。「女性の婚礼は遅らせることはできない、というのが長きに渡って続いた伝統であった。『礼記』によると、女性は十五歳から二十歳の間に結婚せねばならない。男性は三十歳までに結婚せねばならない。法律の条文は、結婚できる最低の年齢を規定しているのに過ぎない。宋代では女性は十三歳、男性は十五歳であった。」/〔女人的婚姻大事不能耽擱, 這是長久以來的傳統。《禮記》説女子應在 15 － 20 歳結婚，男子不晩于 30 歳。法律條文只規定最低婚齢，宋代爲女 13 歳，男 15 歳〕[1] 宋代では女性は十三歳で男性に嫁ぐことができた。当時二十一歳で蘇軾に嫁いだ王閏之は晩婚であったと言えよう。進士科に及第し、名声が揚がっていた蘇軾が彼女以外の美しい女性と結ばれるのは容易いことであったに違いない。蘇軾はなぜそうしなかったのか？「現代人にとってはまことに奇妙に思える親戚間の婚姻の習慣、すなわちなくなった妻の妹を娶るという習慣が存在した。確かに最初の妻がこのような建議をすることは極めて普遍的であった。例えば、宋代の高級官僚韓琦は次のような事例を報告している。彼の息子の嫁呂氏（一〇三九～一〇六五）が二十七歳で臨終を迎えた時、夫に向って、「私の病は日々に重くなり、もはや治る見込みはありません。私には未婚の妹がおります。あなたが我々夫婦の誼を重んじて後添いにして下さるなら、きっと私の子供をかわいがってくれましょう。また、韓氏呂氏の関係も元の通りですから、私は安心して死んで行けます」…中国では、どの時代にも亡妻の妹を娶る例に事欠かないことを我々は知っているが、宋代にはこのような事例が特に多いように思

う。」/〔一種很普遍且令人奇怪的親戚間的通婚是娶已逝妻子的妹妹。確實，經常是第一個妻子提出這樣的建議。比如, 韓琦報道, 他的兒媳呂氏（1039 ～ 1065）27 歲快要去世時, 對丈夫説：‘我疾勢日加。萬萬不可治，我有幼妹在家。君若全舊恩以續之，必能恤我子。又二姓之好不絶如故，我死無恨矣。’…雖然我們知道中國曆代都有人娶前妻的妹妹，但是看起來這事在宋代特別多。〕[2] この記述から類推するに、蘇軾の正妻王弗は従妹の品行を熟知しており、臨終の折に従妹に自分が残した息子の面倒を見させるように蘇軾に頼んだのではないだろうか。もちろん、様々な状況下、亡妻の妹を娶ることになったこともあります。例えば、姚勉「梅荘夫人墓誌銘」[3] に書いてあるように、姚勉本人が望んで妻の妹を娶っている場合もある。蘇軾より十一歳年下の王閏之は幼いころから抜群の才能に恵まれた従姉の夫を崇拝し敬服していたに違いない。この類推が正しければ、その後、王閏之は王弗の願い通り、王弗の子どもと、自分の二人の子どもを「三子一の如く、愛は天より出ず」(「祭亡妻同安郡君文）4) とあるように平等に育て上げた。蘇軾とともに過ごした二十五年の時間の中で、従姉が残した蘇邁の世話をするとともに、自分の二人の子ども蘇迨（一〇七〇年生)、蘇過（一〇七二年生）を教育した。この二十五年間は蘇軾が官界で浮沈を繰り返した困難な時期であった。北宋の元祐八年(一〇九三年）八月一日、四十六歳の王閏之は京師で病死した。蘇軾が彼女のために書いた作品には、散文としては「阿彌陀佛贊」「釋迦文佛頌並引」「書金光明經後」、詩としては「聞正輔表兄將至以詩迎之」等がある。このほかにも、元祐八年（一〇九三年）に書いた祭文「祭亡妻同安郡君」や、詞の「南郷子・有感」「蝶戀花・泛泛東風初破五」がある。

蘇軾が妻妾のために残した作品の中では、妾の王朝雲を描写した作品が最も多い。朝雲の身の上については蘇軾が書いた「朝雲墓誌銘」からいささか推察ことができる。

> 東坡先生の妾は朝雲と曰う、字は子霞、姓は王氏、錢塘の人なり。敏にして義を好み、先生に事うること二十有三年、忠敬なること一の如し。紹聖三年七月壬辰、惠州に卒す、年は三十四。
>
> 〔東坡先生侍妾曰朝雲、字子霞、姓王氏、錢塘人。敏而好義、事先生二十有三年、忠敬若一。紹聖三年七月壬辰、卒于惠州、年三十四。〕

朝雲が紹聖三年（一〇九六年）に亡くなった時、三十四歳であったとすると、生まれたのは一〇六二年、すなわち嘉佑七年ということになり、蘇軾より二十五歳若い。「先生に事うること二十有三年」によって熙寧七年から蘇軾に従ったとわかる。蘇軾年譜によると、熙寧七年には蘇軾は杭州通判の職に在り、朝雲は十二歳で蘇軾の侍女となった。

元豊六年（一〇八三年）九月二十七日、二十一歳の朝雲は遯を産んでいるから、元豊六年以前、二番目の妻王閏之がまだ健在な時に、朝雲は妾として蘇軾に仕え始めていた。

蘇軾が「朝雲詩」で「余の家には數妾有り、四五年にして相繼いで辭去す。」と言うように、蘇軾には数人の妾がいたらしいのだが、彼女たちを詠った作品はなく、朝雲のために書いた作品だけが数多く残されている。散文としては「朝雲墓誌銘」「惠州薦朝雲疏」、詩としては「哭幹兒二首」「朝雲詩」「和陶和胡西曹示顧賊曹」「悼朝雲」「丙子重九二首」、詞としては「南歌子・雲鬢裁新綠」「浣溪沙」「浣溪沙・輕汗微微透碧紈」、「殢人驕・白髮蒼顏」、「三部樂・美人如月」、及び悼亡詞の「西江月・玉骨那愁瘴煙霧」、「雨中花慢・嫩臉羞蛾因甚」などの作品がある。

蘇軾を研究した論著のなかでも、蘇軾と愛妾王朝雲を扱ったものは数多い。例えば、曾棗莊の「東坡詞中的朝雲」あるいは林語堂の『蘇東坡伝』第二十六章の「仙居」（合山究氏の翻訳では「朝雲とのロマンス」となっている）等があるが、蘇軾と王弗、蘇軾と王閏之の関係を専門に論じた論著はほとんど存在しないといってよい。アメリカのカリフォルニア大學デービス校 Beverly Bossler（ベヴァリー・ボスラー）は、その「北宋知識人階層の社會生活における家妓の役割に關する考察」の中で次のように述べている。「朝雲への文章と蘇軾が二人の妻へ向けて書いた文章とを比較すると前者における間接的かつ率直な愛情の表現が非常に際立っている。1065 年蘇は最初の妻の死に対する墓誌を書いているが、それらは彼が母親に命じられて書いたものだと言う事が碑文の中から伺える。……蘇軾は彼が恵州に左遷される少し前に亡くなった二番目の妻に対する追悼碑を書いていない。彼は彼女の為に四つの詩を作詩しているが、その内三つは単に彼女の記憶の中で描かれた佛の想像図に対して呈したものであり、その内の二つは蘇軾の息子が原因で書き始めたものである。蘇が二番目の妻の為に書いた最も個人的な文章は祭文である。それは彼女がよき妻であり母であった事と、何も言わずに彼について南方（左遷された初期の段階）へ来た事を褒め稱えているが、明確な深い愛情を表してはいない……」[5]。これは真実であろうか。上記の引用文集に「1065 年蘇は最初の妻の死に対する墓誌を書いているが、それらは彼が母親に命じられて書いたものだと言う事が碑文の中から伺える」とあるが、蘇軾の母親は嘉佑二年（一〇五七年）になくなっており、彼の最初の妻は治平二年（一〇六五年）に死んでいるので、蘇軾は確かにこの年に亡妻のために墓誌名を書いている。蘇軾の母が亡くなってからすでに八年経過していて、どうして母が彼に嫁の墓誌銘を書くように命じることができようか。この他、確かに蘇軾が王朝雲に残した作品が最も多いこと、朝雲に対して率直に愛情を表明しているということは認めよう。しかし正妻王弗と第二の妻王閏之に対する明確な愛情を表明し

ていない、というのはどうであろうか。蘇軾が三人の妻妾を対象として書いた作品の中に、信頼すべき解答を見出していこう。蘇軾はこの三人の女性に対して本物の愛情を抱いていたのであろうか。彼の理想の女性像、妻妾に対する価値基準とはどのようなものであったのか。これらの問題を追及していきたいと考えている。

第二節　蘇軾が妻妾を描いた詩文の特徴

蘇軾は妻妾のために多量の作品を書いたわけではない。しかし、さほど多くない作品の中に、非常に新鮮なイメージを見ることができる。この三人の女性は朝夕蘇軾と生活を共にしていたので、蘇軾は自らの真実の経験、考え方を筆端に載せており、我々はそこから彼の妻妾に対する態度や評価を汲み取ることができる。蘇軾の妻妾描写には次のようないくつかの特徴が見られる。一、詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた。二、妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明した。三、妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した。四、彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈る文章を何篇も書いた。以下逐条的に見ていこう。

一、詩と並び宋代に流行した文学ジャンルであった詞において、妻妾の美貌を堂々と讃えた

蘇軾の作品、とりわけ詞作の中において、蘇軾が女性の容貌をいかに重視していたかを観察することができる。貴婦人であれ、庶民の女性であれ、舞姫であれ、彼の手にかかるとどの女性も比べようもない、人を驚かす美貌に描かれる。「南郷子・集句」（一〇五四年作）という作品を挙げる。

> 寒玉　細凝の膚、清歌　一曲　倒金壺。冶葉　倡條　徧く相識る、争でか如かん、豆蔻　花梢く　二月の初めに。　　年少は即ち須臾にして、芳時に醉工夫を偸み得たり。邏帳　細かく垂る　銀燭の背に。歡娛す、平生の俊氣を豁(す)て得るや無(いな)や。
> 〔寒玉細凝膚、清歌一曲「倒金壺」。冶葉倡條徧相識、争如、豆蔻花梢二月初。
> 　年少即須臾、芳時偸得醉工夫。邏帳細垂銀燭背、歡娛、豁得平生俊氣無。〕

葉嘉瑩主編の『蘇軾詞新釋輯評』[6]の「講解」は言う、「南郷子」は仁宗至和元年（一〇五四年）二月あるいは二月以後に作られた。東坡は当時十九歳で、「年少」と自称している。

その年王弗を妻に迎え、王氏は時に十六歳であり、まさに豆蔻の年頃であった。この詞は新婚を記念した作品である。」この説に従えば、この詞の内容から蘇軾の妻王弗の容貌に対する称賛の念をはっきりと看取することができよう。「寒玉細凝膚」は妻の肌の美しさを描写する。寒玉のように白く輝き、透明感にあふれ、細やかに凝脂みなぎる肌、蘇軾はこのように王弗の容貌をほめちぎる。「清歌一曲」は妻の声の美しさを表現し、「冶葉倡條」は柳のようななよなよとした肢体を描出している。蘇軾によれば、妻王弗は美貌と才芸を一身に兼ね備えた女性であった。次の詞「南郷子・有感」においても、蘇軾はある美しく優雅な妻のイメージを形成している。

> 冰雪のごとき香肌透われ、姑射仙人も伊に似かず。濯錦江頭の新様の錦、宜しきに非ず、故に尋常の淡薄の衣を著る。　暖日に重幃を下ろし、春睡に香凝りて起きるを索むるも遅し。曼倩の風流　底事に縁る、當時、愛されて西真に兒と換作る。
>
> 〔冰雪透香肌、姑射仙人不似伊。濯錦江頭新様錦、非宜、故著尋常淡薄衣。
> 暖日下重幃、春睡香凝索起遅。曼倩風流縁底事、當時、愛被西真換作兒。〕

薛瑞生の『東坡詞編年箋證』[7] 巻三の「考證」は次のように言っている、「「年譜」「紀年録」「總案」は失載し、朱、龍は編年せず。「蝶戀花・泛泛東風出破五」と合せ觀るに、此の詞は蓋し公の繼室王氏夫人閏之の爲の作と臆えり。」これが正しいとするならば、この詞も同様に二人目の妻王閏之の外貌やスタイルを描写した作品にほかならない。東坡の眼中にあっては、妻王閏之の肌は氷のごとく白皙であって柔らかく、淡く香気を発しており、神話の姑射山中に住む美しい神女のようであった。しかし、神女と愛妻を較べると、妻の美貌のほうが一枚上手であるとさえ言明している。「不似伊」の三文字は、東坡がいかに妻を愛していたかを物語っているし、妻の美貌がいかに自慢であったかが見て取れる。同様の描写は朝雲を対象として作った「西江月・玉骨那愁瘴煙霧」（一〇九六年作）にも見られる。

> 玉骨　那んぞ愁えん瘴霧を、冰姿自ずから仙風有り。海仙　時に遣して芳叢を探らしむ、倒しまに挂かる綠毛の幺鳳あり。　素面常に粉涴を嫌う、洗妝するも唇紅を褪せしめず。高情已に曉雲を逐いて空しく、梨花と夢を同じくせず。
>
> 〔玉骨那愁瘴霧、冰姿自有仙風。海仙時遣探芳叢、倒挂綠毛么鳳。　素面常嫌粉涴、洗妝不褪唇紅。高情已逐曉雲空、不與梨花同夢。〕

瘴厲の地である恵州に身を置く朝雲は、この地に咲く梅の花の如く、氷や雪のように白い肌と、神仙のような雰囲気を漂わせている。「素面常に粉涴を嫌う、洗妝するも唇紅を褪せしめず」化粧を施したとして、彼女が生まれながらに備えている化粧が必要ないほどの美貌のである。また、「三部樂・美人如月」（一〇九五年作）は次のように詠う。

> 美人は月の如し、乍ち暮雲に掩わるるを見、更に妍絶を増す。…　今朝　酒を置くに強いて起き、問う誰が爲に一分の香雪を減動するやと。何事ぞ散花　卻って病み、維摩　疾無きや。卻(ま)た眉を低くし、慘然として答えず。金縷を唱い、一聲　怨切たり。折るに堪えれば便ち折るべし。且つ惜取せよ、年少にて花發するを。〔美人如月、乍見掩暮雲、更增妍絶。…　今朝置酒強起、問爲誰減動、一分香雪。何事散花卻病、維摩無疾。卻低眉、慘然不答。唱金縷、一聲怨切。堪折便折。且惜取、年少花發。〕

もう一首、「殢人嬌・贈朝雲」白髪蒼顔（一〇九五年作）がある。

> 白髪にして蒼顔、正に是れ維摩の境界なり。空たる方丈　散花　何ぞ礙(さまたげ)あらん。朱唇　筋點、更に髻鬟　彩りを生ず。　這些箇は千生萬生　只ら在り。好事の心腸、人に著(なじ)むの情態、閒窗の下　雲を斂め黛を凝らす。明朝は端午、蘭を紉ぎて佩と爲すを學ぶを待ち、一首の好詩を尋ねて、要(かならず)に裙帶に書すべし。
> 〔白髪蒼顔正是維摩境界。空方丈散花何礙？朱唇筋點更髻鬟生彩。　這些箇千生萬生只在。好事心腸、著人情態、閒窗下斂雲凝黛。明朝端午、待學紉蘭為佩。尋一首好詩、要書裙帶。〕

東坡が晩年に恵州で朝雲に書き与えた詩や詞においては、「維摩」と自称し、朝雲を「散華の天女」に喩えている。例えば、「殢人嬌・贈朝雲」白髪蒼顔には「白髪にして蒼顔、正に是れ維摩の境界なり。空なる方丈　散花　何をか礙(さまたげ)あらん」とあり、「朝雲詩」にも、「天女　維摩　總べて禪を解す」という句がある。『維摩詰経』觀衆生品第七８　には「時に維摩詰の室に、一天女有り。…諸大人説く所の法を聞くを見て便ちに身を現し、即ちに天華を以て諸菩薩大弟子の上に散ず。化して諸菩薩に至るに即ちに皆墮落し、大弟子に至るに便ち著きて墮ちず…」とある。天女散華は、色戒が已に尽きたか否かを試すリトマス試験紙であり、菩薩のような悟りを得た人物は、花が身に付着しないし、結習がまだ除かれていない人物は、花が体に付着して落ちないのである。「三部樂・美人如月」

には「何事ぞ散花　卻りて病み、維摩　疾無きや」とあり、東坡が自らを維摩に喩えており、「空なる方丈　散花　何をか礙あらん」という句は、自分が已に「無塵無垢」なる境地に達しており、朝雲が散華しても問題ない、と主張しているのである。「三部樂・美人如月」が朝雲を詠った作品であることにまちがいはない。

「三部樂・美人如月」では蘇軾は力をこめて朝雲という美しいが、病気でやつれてしまった「美人」のイメージを浮き彫りにしている。この「美人」は明月のように輝いていて、やつれた面影は更に艶麗さを増し、薄雲に覆われた月のように、ありとあらゆる姿態を呈している。「暮雲に掩われ」という三文字で病中の西施のように美しさを増した朝雲を表現しているのである。蘇軾は具体的に朝雲の容貌のどこが美しいと描写しているわけではなく、さえざえとした光を放つ月に彼女の容貌を喩えており、女性の脱俗の美を描きこそすれ、蠱惑的な美しさは感じられない。「落ち尽くす一庭の紅葉」といった物寂しい秋の風物の中、「眉を低くし、慘然として答えざる」憂愁にとらわれた悲しげな女性のイメージが紙上に躍動している。「殢人嬌・贈朝雲」では、この散華の仙女は「朱唇　筋點たりて、更に髻鬟　彩りを生ず」と形容され、サクランボのように小さな唇、雲なす髪の持ち主である。さらに注目せねばならないのは、蘇軾が「蘭を紉ぎて佩と爲す」を用いて朝雲を賛美している点である。「蘭を紉ぎて佩と爲す」は屈原作『楚辞』[9] 離騒が出典である。〔紛吾既有此内美兮、又重之以修能。扈江蘺與辟芝兮、紉秋蘭以爲佩。〕この句の「江蘺」、「辟芝」、「秋蘭」はすべて香草であって、屈原はこれらの語彙を使い、自らの内面の美しさに喩えている。すなわち文中の「好事心腸」がそれに当たる。蘇軾は屈原が自らの内側の品徳を讃えた語彙を使って朝雲を讃えているのである。そうすることによって蘇軾は朝雲に対する敬慕の念を表明し、更に「淤泥より出でて染まらざる」、内心の美に満ち溢れた愛妾のイメージを形成しているのである。以上の例から、蘇軾が読者に向かって呈示した妻妾たちの非凡な容貌とスタイルのイメージを感じ取っていただけたと思う。

二、妻妾の高潔な人格を称賛し、彼女たちに対する敬意を表明した

蘇軾が描いた妻妾たちは、容貌に秀でているだけでなく、内面の美しさも併せ持っていた。蘇軾は「亡妻王氏墓誌銘」（一〇六六年作）の中で次のように書いている。

> 君諱は弗、眉の青神の人、鄉貢進士方の女なり。生まれて十有六年にして軾に歸ぐ。子邁有り。君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ。

〔君諱弗、眉之青神人、鄉貢進士方之女、生十有六年而歸于軾。有子邁。君之未嫁、事父母、既嫁、事吾先君、先夫人、皆以謹肅聞。〕

これは蘇軾が初めの妻王弗を追悼して書いた墓誌銘である。十六歳で人妻となった王弗は、「君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ。」とあるとおり、父母、嫁ぎ先の両親を問わず、誠実に孝養を尽くした人であった。

同様に、彼の二番目の妻王閏之も、賢明で慈しみ深い品性と、従順な性格を備えていた。「南鄉子・有感」の後半部でも、王閏之の勤倹実直な品格に触れている。詞人は、「濯錦江頭の新様の錦、宜しきに非ず、故に尋常の淡薄の衣を著る」と詠い、きらびやかな錦織の衣服は王閏之には似つかわしくなく、普通の地味で素朴な衣服を身に着けたいと願っていた。

「祭亡妻同安郡君文」（一〇九三年作）で、蘇軾は王閏之の品徳を高く評価している。

嗣ぎて兄弟と爲り、君の賢なるに如くは莫し。婦職既に修め、母儀甚だ敦し。三子一の如く、愛は天より出ず。我に從いて南行するに菽水なれども欣然たり、湯沐兩郡なれども、喜びは顔に見れず。

〔嗣爲兄弟、莫如君賢。婦職既修、母儀甚敦。三子如一、愛出于天。從我南行、菽水欣然。湯沐兩郡、喜不見顔。〕

「嗣ぎて兄弟と爲り、君の賢なるに如くは莫し。婦職既に修め、母儀甚だ敦し。」とあるように、蘇軾は妻に対し、賢明さは誰も及ぶ者とてなく、女性が身に付けるべき技芸にすべて熟達し、言動はすべて母親の規範を満たしていた、という最大級の賛辞を贈っている。更に得がたいことには、彼女は、「三子一の如く、愛は天より出ず。」という一視同仁の態度を以て前妻が残した息子と、自分の二人の息子を育て上げたことである。蘇軾が王閏之のために作った詞「蝶戀花・泛泛東風初破五」（一〇九〇年作）でも、次のように詠っている。

泛泛たる東風　初破の五。江柳　微かに黄ばみ、萬萬　千千の縷。佳氣　鬱蔥として繡戸に來り、當年　江上　奇女を生む。　一琖の壽觴　誰の與にか舉げん、三箇の明珠は、膝上の王文度なり。窮鱗を放ち盡くすも圉圉たるを看て、天公爲に下す曼陀の雨。

〔泛泛東風初破五。江柳微黄、萬萬千千縷。佳氣鬱蔥來繡戸、當年江上生奇女。
一琖壽觴誰與舉、三個明珠、膝上王文度。放盡窮鱗看圉圉、天公爲下曼陀雨。〕

「三箇の明珠は、膝上の王文度なり」の部分では、「祭亡妻同安郡君文」と同様に、三人の息子を一視同仁に扱っていたことを讃美している。「祭亡妻同安郡君文」の他の部分では「我に從いて南行するに、菽水なれども欣然たり。湯沐　兩郡なれども、喜びは顔に見われず」と述べており、王閏之は栄耀栄華に対してはとても淡白で、逆境にも泰然としていた。王閏之が伝統的な美徳を備えた女性であったことは明らかである。妻の聡明さにより、蘇軾の彼女に対する情愛が増したのに違いない。この他、次のテキストにもその一斑が表れている。

客曰く、今者の薄暮、網を舉げて魚を得たり、巨口細鱗、狀は松江の鱸に似たり。顧だ安にか酒を得る所ぞと。歸りて諸を婦に謀る。婦曰く、我に斗酒有り、これを藏すること久し。以て子の不時の需めを待つ。
〔客曰、今者薄暮、舉網得魚、巨口細鱗、狀如松江之鱸。顧安所得酒乎。歸而謀諸婦。婦曰、我有鬥酒、藏之久矣、以待子不時之需。〕（「後赤壁賦」・一〇八二年作）

小兒は愁いを識らず、起坐して我が衣を牽く。我は小兒を嗔(しか)らんと欲するに、老妻は勸む小兒は癡なり、兒は癡なれども君は更に甚だし、樂しまず愁えて何をか爲さんや。坐に還りて此の言に愧ずるに、盞を洗いて我が前に當つ。大いに勝る劉伶の婦の、區區として酒錢の爲にするを。
〔小兒不識愁、起坐牽我衣。我欲嗔小兒、老妻勸兒癡。兒癡君更甚、不樂愁何爲？還坐愧此言、洗盞當我前。大勝劉伶婦、區區爲酒錢。〕（「小兒」詩・一〇七五年作）

友人が蘇軾を赤壁の夜遊にさそってくれたが、酒の肴はあっても、酒がない。蘇軾は賢妻が折々自分のためにこっそりと酒を貯えておいてくれていることをよく知っていたため、妻に話してみると、案の定願いがかなったのである。このような細やかな描写は夫の妻に対する感激の情を婉曲に表わしていないだろうか？自分が「小兒を嗔らんと欲」した時には、「小兒は癡なり、兒は癡なれども君は更に甚だし、樂しまずして愁えて何をか爲さんや。」と慰めてくれ、「盞を洗いて我が前に當」いてくれたそうである。この短い表現の中に、妻が温かい言葉をかけて夫の胸をすっきりさせ、杯を洗い、燗酒を注いでくれる日常生活の一こまが読者の眼前に再現されている。人情の機微によく通じた

妻のイメージがしなやかに蘇ってくる。自分は「區區として酒錢の爲にする」「劉伶の婦」にはるかに勝る賢妻を持っていると手放しで喜んでいるのも不思議はない。

> 子の還(な)お責む可きは元亮に同じきも、妻は却って差(やや)だ賢にして敬通に勝れり。若し我が貧しきは天の賦する所と問わば、遷謫に因りて始めて囊空しからざるなり。〔子還可責同元亮、妻卻差賢勝敬通。若問我貧天所賦、不因遷謫始囊空。〕（「次韻和王鞏六首」之五・一〇八六年作）

「元亮」は陶淵明を指し、「敬通」は馮衍を指す。林語堂は言う、「蘇東坡の家庭はとても幸せであった。ある詩の中で彼は自分の妻が聡明さと徳性を兼備していると褒め称えている。自分の妻は、彼の友人たちの妻や、歴史上数多くの学者たちの妻のように夫を虐待することはないのだ、と彼は言いたいようである。彼の長男蘇邁は時に詩を書いたが、彼を含めて蘇軾の子供たちには左程の才華はなかった。晋朝の大詩人陶潜も一切を天命に任せようという心情で「責子詩」を作り、子どもたちは一人も物にはならなかったが、それは天の配剤であり自分には無関係だとして、「天運　苟くも此の如ければ、且つ進めん杯中の物」と書いた。蘇東坡は「子の還お責む可きは元亮に同じきも、妻は却って差だ賢にして敬通に勝れり」と述べている。「敬通」は後漢の学者である。蘇東坡はこの句に「僕の文章は馮衍に逮ばざると雖も、慷慨大節は乃ち此の翁に愧じず。衍は世祖の英容好士に逢うも獨り遇わず、流離擯逐せらるること、僕と相い似たり、而して其の妻妒悍甚だし。僕此の一事を少(か)く、故に「敬通に勝る」の句有り。という自註を加えている。」／〔蘇東坡家庭很幸福，在他的一首詩裏，他説妻子很賢德。這句話的意思是他妻子並不像他好多朋友的妻子，或是過去曆史上好多名學者的妻子那洋淩虐丈夫。雖然長子邁這時也能寫詩，但幾個兒子並沒有什麽才華。晉朝大詩人陶潛也以憂傷任命的心情寫過一首‘責子詩’，説兒子好壞全是天命，自己何必多管，他説：‘天意苟如此，且進杯中物。’蘇東坡説：‘子還可責同元亮，妻卻差賢勝敬通。’敬通爲東漢學者。蘇東坡這句詩自己加的注脚裏説：‘仆文章雖不逮馮衍，而慷慨大節乃不愧此翁。衍逢世祖英容好士而獨不遇，流離擯逐，與仆相似，而其妻妒悍甚。仆少此一事，故有勝敬通之句。’[10]〕

先に述べたように、蘇軾は元豊六年以前、二番目の妻王閏之が健在な時に朝雲を妾とした。当時にあっては、封建時代の正統な士大夫が妾を持つことは極めて自然なことであった。しかし妻たちは泰然とした態度を維持し、嫉妬をしなかったのであろうか？馮衍の妻のように凶猛で嫉妬深い妻は存在しなかったのであろうか？そこで林語堂は次のような結論に至った。「蘇東坡の妻が杭州で朝雲を買った時、彼女はたった十二歳であ

った。宋代の呼称では、彼女は蘇夫人付きの妾ということになる。妻の侍女が昇進して夫の妾になることは、古代中国ではごく普通の事であった。このような妾はどの角度から見ても夫人の助手と言えるだろう。妻が夫の面倒を見る際に、妾は普通の侍女よりもずっと使い勝手がよかった。必ずしも夫を避ける必要がなかったからである。」/〔蘇東坡的妻子在杭州買朝雲時，她才十二歲。按照宋朝時的名稱，我們可以説她是蘇太太的妾。妻子的丫鬟可以升而爲丈夫的妾，在古代中國是極平常的事。如此一個妾，無論在哪方面，都不失爲太太的助手。因爲妻子要伺候丈夫，比如准備洗澡水，妾就比壹個普通丫頭方便得多，不必在丈夫面前有所回避了〕[11]。王閏之のこのような性質によって蘇軾はとても気分よく日常生活を送ったに違いない。この他にも、蘇軾の弟蘇轍が書いた「亡嫂王氏を祭る文」にも、この妻の賢明さと気立ての優しさが表れている。

> 兄は剛にして塞(まこと)、物或いは容れず。既に以て世に名だたるも、亦た以て逢わず。轍は驟かに従い、初めは未だ憂うるを免れず。嫂は婦人を以てこれに處するに優なり。兄は語言に坐(よ)りて、叢棘に收畀せらる。邾城に竄逐せられて、以て自ら食する無し。還るを賜りて來り、歳は未だ期に及ばず。西垣に飛集し、遂に北扉に入る。貧富戚忻、觀る者盡く驚く。嫂は其の間に居り、色聲を動かさず。冠服肴疏、率いて其の先に従う。性固よりこれ有り、學びて然るに非ず。族人は咨嗟し、行いを觀て報を責む。
> 〔兄剛而塞、物或不容。既以名世、亦以不逢。轍驟而從、初未免憂。嫂以婦人、處之則優。兄坐語言、收畀叢棘。竄逐邾城、無以自食。賜環而來、歳未及期。飛集西垣、遂入北扉。貧富戚忻、觀者盡驚。嫂居其間、不改色聲。冠服肴疏、率從其先。性固有之、非學而然。族人咨嗟、觀行責報。〕

王閏之の優しく思いやりある態度によって、妾朝雲の存在も東坡の心の奥深いところまで浸透して行ったのではないだろうか。もちろん、朝雲が単に若くて美しいだけの女性であったら蘇軾の気持ちをここまで引き付けたはずがない。蘇軾より二十五歳年下の朝雲も二人の妻同様にまことに得がたい高潔な人格を備えていた。蘇軾の「朝雲詩並びに引」（一〇九四年作）の引子の部分を見てみよう。

> 樂天も亦た云う、病は樂天と相伴いて住(とど)まり、春は樊子に隨いて一時に歸ると。則ち是れ樊素竟(つい)に去るなり。予が家に數妾有り、四五年相繼(あいつ)いで辭去す。獨り朝雲のみ予に随いて南遷す。樂天の集を讀むに因りて、戯れに此の詩を作る。朝雲

姓は王氏、錢唐の人なり。嘗て子有り幹兒（かんじ）と曰う、未だ期ならずして夭すと云う。〔……樂天亦云、病與樂天相伴住、春隨樊子一時歸。則是樊素竟去也。余家有數妾、四五年相繼辭去、獨朝雲者、隨予南遷。因讀樂天集、戯作此詩。朝雲姓王氏、錢唐人。嘗有子曰幹兒、未期而夭云。〕

この詩の中で、蘇軾は「予が家に數妾有り、四五年相繼（あいつ）いで辭去す。」と自分には何人かの妾がいたと明かし、数人の妾の中で、災難を蒙り南方に追放された自分についてきてくれたのは、「忠敬　一の如」き朝雲だけだったと述べている。紹聖三年（一〇九六年）、朝雲のために自身が書いた「朝雲墓誌銘」では次のように言っている。

東坡先生の妾は朝雲と曰う、字は子霞。姓は王氏、錢塘の人なり。敏にして義を好み、先生に事うること二十有三年、忠敬なること一の如し。
〔東坡先生侍妾曰朝雲、字子霞、姓王氏、錢塘人。敏而好義、事先生二十有三年、忠敬若一。〕

この二篇の詩文によって、朝雲が蘇軾に二十三年仕えた（一〇七四年から一〇九六年に亡くなるまで）事がわかる。この二十三年間、蘇軾は官界で浮沈を繰り返し、杭州、密州、徐州、黄州等の地方都市と都を行ったり来たりしている。蘇軾は新法党と旧法党の紛争の影響を受けた。この間、「烏台詩案」が起こり、二回にわたり流刑となり、大きな打撃を被った。権勢を失った人間に対しては、多くの人が交際を避けようとするものだが、蘇軾の周辺の人々も次々に彼から離れていく中で、朝雲は彼の側を離れようとしなかった。一〇九四年、蘇軾は伝染病や瘴気に満ちた嶺南の恵州に流されたが、一般人から見ればこれは死刑判決を受けたのに等しかったのである。ところが、朝雲は一切を顧みず、蘇軾とともに恵州にやって来た。これで蘇軾が感激しなかったはずはない。そこで、蘇軾は彼女の墓誌銘の中で、「敏にして義を好み」、「忠敬なること一の如し」と称賛している。残念なことに、二年後（一〇九六年）、三十四歳の若さの朝雲は恵州で病死した。その時蘇軾は六十一歳であった。老いて体が弱くなった蘇軾がこの愛妾を諦めきることがどうしてできただろうか？彼は自らの悲しみを文章に表現するしかなかった。「恵州にて朝雲を薦むる疏」（一〇九六年作）の中で、彼は書いている。

軾は罪責を以て、炎荒に遷さる。侍妾王朝雲あり、一生辛勤し、萬里隨從す。時の疫に遭い、病に遘（あ）いて亡す。其の死を忍びての言を念いて、棲禪の下に托さん

と欲し、故に幽室を營み、以て微軀を掩わんとす。
［軾以罪責、遷于炎荒。有侍妾王朝雲、一生辛勤、萬里隨從。遭時之疫、遘病而亡。念其忍死之言、欲托棲禪之下、故營幽室、以掩微軀。］

「一生辛勤し、萬里隨從す」という言葉に蘇軾の万感の思いが込められており、また愛妾の死に対する無念さがにじみ出ている。蘇軾は「朝雲を悼む」（一〇九六年作）詩の中で、次のように嘆くほかなかった。

景を駐（とど）めんとするも、恨むらくは千歳の藥無く、行くを贈るに惟だ小乘の禪有るのみ。……歸りて竹根に臥して遠近と無く、夜燈　勤めて禮さん　塔中の仙を。
〔駐景恨無千歳藥、贈行惟有小乘禪。……歸臥竹根無遠近、夜燈勤里禮塔中仙。〕

このように、蘇軾が妻妾を描いた詩文には、しばしば妻妾の高潔な品格に対する称賛が見られ、妻妾たちに対する敬服、感激の念が行間に溢れている。

三、妻妾の情感を尊重し、才智を称え、彼女たちの人間としての存在価値を肯定した

蘇軾の妻妾観と同時代の文人のそれとはよく似た一面がある。彼もまた妻たちの才学に関心を持ち、称賛していたのである。この点については、拙文「梅堯臣の詠妻詩とその妻に対する観念」[12]で詳論した。蘇軾の最初の妻王弗もまた屏風の後ろに身をひそめて客と夫の会話を聞いていた。妻のこの挙動に対して、蘇軾は肯定的にとらえており、「亡妻王氏墓誌銘」（一〇六六年作）の中で言及している。

其の始めは、未だ嘗て自ら其の書を知るを言わざるなり、軾の書を読むを見れば、則ち終日去らず。亦た其の能く通ずるを知らざるなり、その後、軾忘るる所有らば、君能くこれを記す。其の他書を問えば、則ち皆略ぼこれを知る。是に由りて始めて其の敏にして、静かなるを知るなり。軾の鳳翔に官するに従う。軾外に爲す所有らば、君未だ嘗てその詳を問知せずんばあらず。曰く、子親を去ること遠し、以て慎まざるべからずと。日び先君の軾を戒（いさ）むる所以（ゆえん）の者を以って相語（あいかた）るなり。軾客と外に言うに、君屏間に立ちてこれを聴き、退きては、必ず其の言を反覆して言いて曰く、某人は言えば輒ち両端を持し、惟だ子の意のみこれを嚮う。子何を用て是の人と言うやと。来たりて軾と親厚を求むること甚だしき者あり、君曰く、恐らくは久しうするころ能（あた）わざらん。其（そ）れ人にくみすること鋭ければ、其れ

人を去ること必ずや速やかならんと。已にして果たして然り。將に死なんとする歳、其の言聴くべき多く、識有る者に類す。

〔其始、未嘗自言其知書也。見軾讀書、則終日不去、亦不知其能通也。其後軾有所忘、君輒能記之。問其他書、則皆略知之。又是始知其敏而靜也。從軾官於鳳翔。軾有所爲于外、君未嘗不問知其詳。曰、子去親遠、不可以不慎。日以先君之所以戒軾者相語也。軾與客言于外、君立屏間聽之、退必反覆其言曰、某人也、言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言。有來求與軾親厚甚者、君曰、恐不能久。其與人鋭、其去人必速。已而果然。將死之歳、其言多可聽、類有識者。〕

王弗は郷貢進士王方の娘で、名門の出と言えよう。しかし、蘇軾は初めは彼女が学識を備えているとは知らなかった。「軾の書を読むを見れば、則ち終日去らず」であったのだが、蘇軾が読んだ書物の内容を思い出せない時に、彼女は逆によく記憶していたのである。「其の他書を問えば、則ち皆略ぼこれを知る。」蘇軾が訊ねた書物は、おそらく『女誡』の類ではない、男性が読む書物であったのに違いないが、彼女はその大略を心得ていた。「軾外に爲す所有らば、君未だ嘗てその詳を問知せずんばあらず。曰く、子親を去ること遠し、以て慎まざるべからずと。日び先君の軾を戒むる所以(ゆえん)の者を以って相語(あいかた)るなり」という記述から判断して、彼女は記憶力が強いだけでなく、明敏な頭脳も備えており、父母から遠く離れているのだから、何事にも慎重に行動するようにと蘇軾に警告を与えていた。彼女は夫の交友関係にも関心を持ち、友人一人一人の性格の本質を見抜き、廉潔な人物、邪悪な意図を隠している人物を弁別して、夫が騙されることがないよう細心の注意を払っていた。妻王氏が蘇軾の閨中の参謀役となっていたことは言うまでもない。蘇軾以前には、このような日常生活の描写は、宋代の女性を描いた作品の中でもそう多くはないであろう。

蘇軾が「老妻」と常々称していた王閏之に関しては、文字が読めたかどうかを判断する材料はない。しかし、蘇軾の詩文の中から、彼女が相談相手にふさわしい賢妻であったことが見て取れる。「晁無咎學士の相迎えるに次韻す」詩（一〇九二年作）には、「家に還るに婦と計るを需む、我は本と歸路は西南に連なる」とある。また、「正輔表兄將に至ると聞きて詩を以てこれを迎う」詩（一〇九五年作）には「但だ恨む參語の賢、忽ち九原の幽に潜むを」とあり、自注で「軾は婦を喪いて已に三年なり、正輔近きに亦た亡嫂の戚しみ有り」と説明している。これらの詩句に登場する「婦」はともに王閏之を指す。「參語」は『漢書』[13] 楊敞傳に基づく言葉で、楊敞が大将軍霍光から昌邑王の廃立を持ちかけられ、決めかねている時、楊敞の夫人がたちどころに霍光に同心するよう

決断を促し、霍光の使者、楊敞、夫人の三人が相談して決定したというわけで、「參（三）語」という成語が生まれたのである。蘇軾はここで王閏之を国家の大事を相談できる楊敞夫人に喩えているのである。この点から見ても、王閏之がまったく見識を持たぬ田舎者でなかったことが分かる。彼女が在世の時には、蘇軾はいつも彼女重要な事柄について相談を持ちかけていたに違いない。

以下に『侯鯖録』[14]の「東坡州堂前召飲」という記事を引いてこの点を補強しておこう。

> 元祐七年正月、東坡先生汝陰に在り、州堂の前に、梅花大いに開き、月色鮮霽たり。先生の王夫人曰く、春月の色勝ること秋月の如し、秋月の色は人を令て淒慘たらしめ、春月の色は人を令て和悦たらしむ。趙德麟の輩を召きて此の花下にて飲むに何如（いずれ）ぞと。先生大いに喜びて曰く、吾知らず子も亦た詩を能くするや。此れ真に詩家の語なるのみと。遂に相召き、二歐とともに飲む。是の語を用いて減字木蘭花詞を作りて云う、春庭　月午、影は春醪に落ちて光は舞わんと欲す…似ず　秋光の、只だ離人と共に斷腸を照らすに。
>
> 〔元祐七年正月、東坡先生在汝陰、州堂前、梅花大開、月色鮮霽。先生王夫人曰、春月色勝如秋月色、秋月色令人淒慘、春月色令人和悦。何如召趙德麟輩來飲此花下。先生大喜曰、吾不知子亦能詩耶。此真詩家語耳。遂相召、與二歐飲。用是語作減字木蘭花詞云、春庭月午、影落春醪光欲舞…不似秋光、只共離人照斷腸。〕

「蘇軾詞編年校註」に「減字木蘭花・春庭月午」の校註[15]でもこの点に言及している。文豪の妻として、夫に事える日々の中で、知らず知らずのうちに、自分の教養を高めて行ったのであり、夫の創作に霊感を与え、折々その才知を現したのであった。

朝雲の才知に関しては、次のような材料もある。朝雲を哀悼した詩の序で彼は次のように述べている。

> 朝雲初めは字を識らず、晩に忽ち書を學ぶ、粗ぼ楷法有り。蓋し嘗て泗上の比丘尼義沖に從って佛を學ぶ、亦た略ぼ大義を聞く、且に死なんとするや、金剛經の四句の偈を誦して絶ゆ。……
>
> 〔朝雲始不識字、晩忽學書、粗有楷法。蓋嘗從泗上比丘尼義沖學佛、亦略聞大義、且死、誦金剛經四句偈而絶。〕

ここからわかることは、朝雲は蘇軾の家にやってくるまでは文盲だったという事実で

ある。「蘇軾の家が彼女を買った時、ある人が詩を作り彼女に贈った。その中では宛も彼女が才芸に富む杭州の歌妓であるかのように扱われている。しかし、細かに検討してみると、そうではなかったようである。蘇東坡の書いたものから判断して、朝雲は東坡の家にきてようやく読み書きを習い始めたらしい。」/〔在蘇家把她買進門時，有些人作詩給她，就猶如她已經是個富有才藝的杭州歌妓一般。但仔細研究，則知實際並不如此。由蘇東坡自己寫的文字上看，朝雲是來到蘇家才開始學讀與寫〕[16] 朝雲は才子蘇東坡の身辺に仕えるようになって、知らず知らずのうちに影響を受けていった。「泗上の比丘尼義沖」ももちろん朝雲の教育に功があったであろうが、この天分に恵まれ、頭の回転の速かった侍女に字を教えたのは蘇東坡その人であったに違いない。後になって朝雲が書法に興味を持つようになると、蘇東坡は喜んで彼女に書法を指南したのである。文盲の段階から読み書きができるようになり、やがて楷書をマスターし、ついには仏教を学び、「亦た略ぼ大義を聞く」レベルにまで到達した。これは明らかに蘇軾の影響力の大きさを物語っている。

以上の分析から、蘇軾が妻妾たちの存在価値を非常に積極的に認めていたこと、蘇軾の妻妾に対する深い情感の双方を見て取ることができよう。彼の筆下における妻妾のイメージを大体以下のようにまとめることができる。三人の王氏は妻であれ侍妾であれ、みな非凡な容貌と高潔な性格を兼備しており、彼から終生離れず、かれに付き添っていた。同様に、妻であれ侍女であれ、蘇軾は誠心誠意彼女たちに接した。王弗は蘇軾の人生行路が順調な時の正妻であり、王閏之は内助の功を発揮した後添いの妻であり、朝雲は始終蘇軾に忠実な侍妾であった。

四、彼の深い仏教信仰の反映として、たびたび亡き妻妾たちの法事を行い、冥福を祈る文章を何篇も書いた

周知のように、蘇軾の思想は非常に複雑である。その思想は儒・道・仏の三教が複雑にからんでいるとされる。若いころの著書には経世済民を目指し、積極的に世の中と関わろうという儒教思想が色濃く見られる。徐々に官界の現実に接すると、排斥や誣告に遭遇し、事志を得ず、何度も流謫を経験した。晩年に至ると、彼の仏教への肩入れがはっきりしてくる。逆境にあって仏教思想は彼の処世哲学となった。波乱万丈の人生を送った蘇東坡にとって、仏教の人生観は心の安定をもたらした。蘇軾は杭州に二度赴任しており、そこが呉越以来仏教が盛んな土地であったため、数多くの名僧と交わりを結んだ。「呉越は名僧多し、予と善き者、常に十に八九あり。」と彼は述べている。[17] 蘇軾の文集にはしばしば僧侶との交遊や詩の応酬の記録が残されている。早くも嘉佑六

年、二十六歳の蘇軾は仏教を題材とした作品「鳳翔八觀　維摩像唐楊惠之塑在天柱寺」(一〇六一年作)を残しており、後に彼が詩でよく口にするある種の感慨を表白している。

今觀る古塑の維摩像、病骨　磊嵬として枯龜の如し。乃わち知る至人の生死に處するや、此身は變化して浮雲に隨うを。
〔今觀古塑維摩像、病骨磊嵬如枯龜。乃知至人處生死、此身變化浮雲隨。……〕

ここの「此身變化浮雲隨／此身は變化して浮雲に隨う」は明らかに『維摩詰經』の「是身如浮雲，須臾變滅／是の身は浮雲の如し、須臾にして變滅す」[18]という観点に酷似している。さらに「海月辯公真贊」(一〇九五年作)でも、

予は方年壯氣盛んにして、厥の官に安んぜず、往きて師に見ゆる毎に、清坐して相對し、時に一言を聞かば、則ち百憂冰解し、形神俱に泰し。
〔予方年壯氣盛、不安厥官、每往見師、清坐相對、時聞一言、則百憂冰解、形神俱泰。〕

ここで言う「大師」とは、海月禪師慧辯を指し、蘇軾が抱えていた様々な心配事はたちまちにして消え失せ、心身ともにリラックスできたのである。この他「贈常州報恩長老」(一〇八五年作)、「淨因淨照臻老真贊」(一〇八八年作)、「葆光法師真贊」(一〇八八年作)、「資福白長老真贊」(一一〇〇年作)、「與徑山長老惟琳二首」(一一〇一年作)等枚挙に暇がない。仏教がいかに彼に安心感をもたらしたかがうかがえる。彼の他の作品の中にも至るところに仏教思想がうかがえる。例えば以下の通り。

我老い人間萬事休す、君も亦た心を洗いて佛祖に從う。香を手にして新たに寫す法界觀、眼は淨くして登伽女を覷ず。
〔我老人間萬事休，君亦洗心從佛祖。手香新寫法界觀，眼淨不覷登伽女。〕(「送劉寺承赴余姚」・一〇七九年作)

君に憑りて借取す法界觀、一洗(いつせん)す人間萬事の非。
〔憑君借取法界觀，一洗人間萬事非。〕(「和子由四首送春」・一〇七五年作)

南華に向い香火を結ばずば、此の生　何處か是れ真依ならん。
〔不向南華結香火，此生何處是真依。〕(「昔在九江、與蘇伯固唱和。……」・

一一〇〇年作）

見聞　隨喜　悉く成佛す、人天と蟲鳥とを擇ばず。但だ當に常に平等觀を作すべし、本と憂樂と壽夭無し。丈六の金身　大と爲さず、方寸の千佛　夫れ豈に小ならんや。此の心　平かなる處　是れ西方、眼を閉ずれば便ちに到る魔嬈無きに。〔見聞隨喜悉成佛，不擇人天與蟲鳥。但當常作平等觀，本無憂樂與壽夭。丈六金身不爲大，方寸千佛夫豈小。此心平處是西方，閉眼便到無魔嬈。〕（「阿彌陀佛贊」・一〇九四年作）

これ以後、波乱と起伏に満ちた人生に揉まれる中で、人生は夢の如し、世間の事は幻なりという心境になっていったのである。彼は「居士」を以て自称したが、煩雑な世事に対して鷹揚に構える、言わば枯淡の境地を表現しようとしたのである。

人間は夢の如し、一尊　還た江月に酹す

〔人間如夢、一尊還酹江月。〕（「念奴嬌　赤壁懐古」・一〇八二年作　）

世事は一場の大夢なり、人生幾度か新涼あらん

〔世事一場大夢、人生幾度新涼。〕（「西江月　世事一場大夢」・一〇八〇年作）

人は秋鴻の來りて信有るに似て、事は春夢の如く了(まった)く痕無し。

〔人似秋鴻來有信、事如春夢了無痕。〕（「正月二十日與潘郭二生出郊尋春忽記去」・一〇八二年作）

「夢の如し」というのは、「大乗十喩」の一つであり、蘇軾の「この身は夢の如し」という思想は仏教が強調する万物・人生はすべて幻で実体がないこと正に「夢の如し」、という思想と酷似している。であるならば、彼が妻妾のために書いた詩文では仏教思想はどのように体現されているだろうか？妻妾たちが人の世を離れようとする時、一人取り残された蘇軾はひたすら仏教に救いを求め、亡くなった妻妾たちの冥福を祈り、成仏するよう懸命に祈りをささげている。

治平二年（一〇六三年）、九月九日、蘇軾は「書大方廣圓覺修多羅了義經」[19]を書いた。彼は文中で亡妻王弗を追念するためにこの経典を書写したと述べている。この時王弗が世を去ってからちょうど百日目であった。一〇九〇年正月五日、後添いの王閏之の誕生日、蘇軾は仏典の『金光明經』の記事を真似て、妻の誕生祝いのために魚を放ち、彼女

のために「蝶戀花　泛泛東風初破五」を作った。題目には自注が付いていて、「同安君の生日に魚を放つ、金光明經の魚を救う事を取る」とある。元祐八年（一〇九三年）八月一日、王閏之が世を去った。十一月十一日、蘇軾は亡妻王閏之のために水陸道場を設け、亡妻の法要を行い、李公麟を招請して釈迦と十大弟子の肖像を描いてもらい、京師に安置し、「釋迦文佛頌」を著した。その引の中で、その間の事情を説明している。

> 端明殿學士兼翰林侍讀學士蘇軾、亡妻同安郡王氏閏之の爲に、奉議郎李公麟に請いて敬して釋迦文佛及び十大弟子を畫かしむ。元祐八年十一月十一日、水陸道場を設けて供養す。軾は拜手稽首して頌を作りて曰く、我願う世尊よ、足指地を按(お)せ。三千大千、淨琉璃の色。其の中の眾生、解脱せざる靡し。
> 〔端明殿學士兼翰林侍讀學士蘇軾、爲亡妻同安郡王氏閏之、請奉議郎李公麟敬畫釋迦文佛及十大弟子。元祐八年十一月十一日、設水陸道場供養。軾拜手稽首而作頌曰、我願世尊、足指按地。三千大千、淨琉璃色。其中眾生、靡不解脱。〕

「我願う世尊よ、足指地を按(お)せ。三千大千、淨琉璃の色」は正に『維摩詰經・佛國品第一』[20]「於是佛以足指按地、即時三千大千世界、若幹百千珍寶嚴飾、譬如寶莊嚴佛無量功德寶莊嚴土」の再現である。さらに、蘇迨、蘇過、蘇邁らは母親の遺命に従い、手を携えて「阿彌陀佛像」を描いた。絵が完成した後、紹聖元年（一〇九四年）、画像を金陵の清涼寺に安置し、蘇軾が自ら筆を取って「阿彌陀佛贊」を書いた。

> 蘇軾の妻王氏、名は閏之、字は季章、年は四十六。元祐八年八月一日、京師に卒す。臨終の夕、受用する所を捨てて、其の子邁迨過をして爲に阿彌陀像を畫かしめよと遺言す。紹聖元年六月九日、像成りて、金陵清涼寺に奉安す。贊に曰く、佛子在りし時百憂繞い、臨行の一念　何に由りて了まん。口に南無阿彌陀を誦すれば、日　地を出て萬國曉となるが如し。
> 〔蘇軾之妻王氏、名閏之、字季章、年四十六。元祐八年八月一日、卒于京師。臨終之夕、遺言捨所受用、使其子邁、迨、過爲畫阿彌陀像。紹聖元年六月九日、像成、奉安于金陵清涼寺。贊曰：佛子在時百憂繞、臨行一念何由了。口誦南無阿彌陀、如日出地萬國曉。〕

この他、王閏之が逝去してから、その子蘇過が母の冥福を祈り、亡き母のために「金光明經」を書写した。蘇過が書写する過程で一つの疑問が生じた。これは本当に起こ

ったことなのか、それとも寓言なのか。蘇軾が息子のために書いた「書金光明經後」（一〇九四年）の中で張安道の言葉を引いてその疑問に答えている。「佛乗は大小と無く、言は亦た虚實非ず、顧だ我が見る所如何なるのみ。萬法は一致す。我れ若し見有らば、寓言も亦た實語なり。若し見る所無ければ、實寓　皆な非なり」仏典の言葉が真実なのか、虚構なのか、仏は実在するのか否か、それはすべて心中の思い一つにかかっている。このように人情の機微に通じた考え方は、蘇軾の人生観そのものではないか。これは正に蘇軾が以前に言っていた、「人は皆世に趨（はし）る、世を出（いず）る者は誰なるや。人は皆世を遺る、世誰かこれを爲す？爰に大士有り、此の兩間に處る」（「海月辯公真贊」）そのものであり、自分も世俗生活の必要性と脱俗への憧れの間で揺れていたのである。「書金光明經後」は息子の疑問に対する回答であると同時に、そこで示された道を彼はすでに自ら実践していたとも言えるのである。

同じように、蘇軾が王朝雲のために書いた詩文の中にも、しばしば彼の仏教思想を見出すことができる。「朝雲詩並引」にはこうある。

> 阿奴　絡秀　老いを同じくせず、天女　維摩　總（みな）禪を解す。經卷藥爐は新しき活計、舞衫歌扇は舊き因緣。丹成りて我に隨いて三山に去る、巫陽雲雨の仙と作らず。
> 〔阿奴酪秀不同老、天女維摩總解禪。經卷藥爐新活計、舞衫歌扇舊因緣。丹成隨我三山去、不作巫陽雲雨仙。〕

ここの「天女　維摩　總（みな）禪を解す」や「經卷藥爐は新しき活計」から判断すると、仏教は彼らの生活の一部分となっていたようである。第二節で引いた「殢人嬌・白髮蒼顔」贈朝雲（一〇九五年）には、「白髮にして蒼顔、正に是れ維摩の境界なり。空なる方丈　散花　何ぞ礙あらん」の句があったし、「三部樂・美人如月」には、「何事ぞ散花　卻って病み、維摩　疾無きや」の句があった。蘇軾は『維摩詰經』の典故を使って自分を超然無垢の維摩詰に比擬している。

紹聖三年（一〇九六年）、朝雲が亡くなった後、蘇軾は「朝雲を悼む並びに引」を作った。

> 苗にして秀でざるは豈に其れ天ならずや、童烏をして我が玄に與（くみ）せしめず。景を駐めんとするも、恨むらくは千歳の藥無く。行くを贈るに惟だ小乗の禪有るのみ。傷心一念、前債を償い、彈指三生後緣を斷つ。歸りて竹根に臥して遠近と無く、夜燈勤めて禮さん　塔中の仙を。
> 〔苗而不秀豈其天、不使童烏與我玄。駐景恨無千歳藥、贈行唯有小乗禪。傷心一

念償前債、彈指三生斷後緣。歸臥竹根無遠近、夜燈勤禮塔中仙。〕

この悼亡詩では、蘇軾は仏教の概念を借りてきて、存分に朝雲に対する思いを表現している。朝雲を失った苦しみに直面すると、彼は深い思いを禅の修行に托して和らげる他なかったのである。「一念」、「前債」、「彈指」、「三生」、「後緣」といった概念のすべてが禅宗の思想体系に属しているわけではない。先に引用した「朝雲詩並びに引」にも「天女　維摩　總(みな)禪を解す。經卷藥爐は新しき活計」という句があった。

蘇軾は人生の蹉跌を幾度となく経験したが、朝雲は終始一貫して彼に付き従い、蘇軾に非常に大きな慰めを与えた。蘇軾の最も身近にいた人間として、朝雲は蘇軾の仏教信仰の影響を受けなかったはずはなく、このことは蘇軾の詩文から一斑を伺うことができる。「朝雲墓誌銘」の中で、詩人はこう書いている。

蓋し嘗て泗上の比丘尼義沖に從って佛を學ぶ、亦た略ぼ大義を聞く、且に死なんとするや、金剛經の四句の偈(け)を誦して絶ゆ。

〔蓋常從丘尼義沖學佛法、亦粗知大意。且死、誦金剛經四句偈乃絶。浮圖是瞻、伽藍是依。如汝宿心、惟佛之歸。〕

朝雲は臨終の際に『金剛經』の四句の偈で蘇軾を諭そうとしているが、この記事の中に朝雲の蘇軾への深い思慕の念が潜んでいることは言うまでもない。そしてこの四句の偈こそ蘇軾が世の中の人々に伝ようとした事ではなかっただろうか。王朝雲の死に至って、蘇軾はいよいよ仏教への傾倒を強めていくようであるが、これは蘇軾が王朝雲一人を伴って恵州へ行き、彼女の死によって晩年の孤独感を強めていったからであると想像される。

互いに助け合って生きて行く日々の中で、蘇軾は王氏の女性たちに安らかな日常生活を送らせる術がなかった。彼女たちが亡くなった後で、彼が唯一できたのは、仏典を書写し、妻妾たちの冥福を祈り、内心の安定を追い求めるすることだけであった。写経の作業に亡くなった肉親への無限の悲しみを託し、写経をすることによって、自分の境遇を改善したいという思いも含まれていたのである。

もちろん、蘇軾は宋一代の文豪であり、その思想は複雑を極めていたであろう。仏教思想の影響だけを受けていたなどというつもりはまったくない。蘇軾は政治的な理想が破綻したため、「万事　到頭　都べて是れ夢」/〔万事到頭都是夢〕(「南郷子 霜降水痕收」・一〇八二年作）と慨嘆しつつも、「此の心耿耿たると雖も、憂國に歸す」/〔雖此心耿耿,

歸於憂國〕（「與騰達道六十八首之八」・一〇八五年作）、「廢棄せらるること久しと雖も、憂畏衰えず」／〔廢棄雖久，憂畏不衰〕（「與騰達道六十八首之十二・一〇八五年作」）と愛国心が衰えていないと表明している。先に述べたように、彼の思想の中には、儒仏道が混在していた。「朝雲詩並引」の末尾をもう一度見てみよう。「丹成りて我に隨いて三山に去る、巫陽雲雨の仙と作らず」の「三山」は道家の伝統的な三つの仙山を指している。彼は仏典の典故を用いて朝雲を「天女」に喩えると同時に、道家の言葉を引いているのである。もしも丹薬が完成したら、私といっしょに蓬莱、瀛洲、方丈の三山に遊ぼう、巫山の神女になる必要はないと述べているように蘇軾はこの詩で道教と仏教を巧妙に融合させている。林語堂は「仏教は人生を否定し、儒教は人生と真正面から取り組み、道教は人生を単純化する。この詩人はその内面世界においてこれらの人生観を混合させたのである。」／〔從佛教的否定人生，儒家的正視人生，道家的簡化人生，這位詩人在心靈識見中産生了他混合的人生觀〕[21] と評している。

第三節　蘇軾が妻妾を詠じた作品における継承と創造

以上の分析から、蘇軾の妻妾に対するスタンスと、蘇軾が描いた妻妾のイメージをとらえることができたと信ずる。彼の妻妾に対する観念には、継承の一面と、創造の一面がある。以下に、彼の同時代人で宋代のある種の詩風の創始者であった梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）及び「唐宋八大家」の一人曾鞏（一〇一九～一〇八三）の妻に対する観念との比較を試み、蘇軾の観念の特徴をはっきりと捉えようと思う。梅堯臣と曾鞏の妻に対する観念の具体的な内容については、拙論「由梅堯臣的詠妻詩看其妻子觀」「曾鞏の妻に対する観念 ―女性墓誌銘を中心にして」[22] をご覧いただきたい。しかし、梅堯臣と曾鞏の作品では侍妾に関する内容に欠けているので、以下の比較は妻だけを対象とする。

先ず、蘇軾は梅堯臣、曾鞏と同じく、妻の婦徳を口を極めて称賛している。妻は賢明で、慈悲深く、道義に厚く、言行はすべて女性としての規範に合致していなければならない、この点は同時代の文人共通の観点である。梅堯臣は「新婚」詩の中で、「幸いに皆淑しき姿、稟賦　誠に獲る所あり」／〔幸皆柔淑姿、稟賦誠所獲〕と詠じ、「途中寄上尚書晏相公二十韻」では、妻を「単舟　匹婦　更に婢無く、朝餐　毎に愧ず婦（つま）の親しく炊ぐを」／〔單舟匹婦更無婢、朝餐每愧婦親炊〕と誉め、さらに「道上謳歌せず、妻も亦た恚嗔せず」／〔道上不謳歌、妻亦無恚嗔〕（「記歳」）、「已に伯倫の婦（つま）の、一醉　猶お傍らに在るに勝れり」／〔已勝伯倫婦、一醉猶在傍〕（「梅雨」）と述べている。曾鞏は、「祭

亡妻晁氏文」の中で、妻は「言は疵悔無く、動は衡規に應ず」/〔言無疵悔、動應衡規〕と賛美し、「衣に穿弊有り、珥に光輝無し」/〔衣有穿弊、珥無光輝〕と生活の慎ましさを讃え、「親疏は悦慕し、稚艾は嗟咨す」/〔親疏悦慕、稚艾嗟咨〕家族間の関係を取り持ったことを褒め、「姑に事うるの禮、左右違うこと無し」/〔事姑之禮、左右無違〕と孝行に努めたことを取り上げる。蘇軾は「亡妻王氏墓誌銘」で、王弗が「君の未だ嫁がざるや、父母に事え、既に嫁いでは、吾が先君先夫人に事う。皆謹肅を以て聞こゆ」のように婦道に合致していたことに言及し、「祭亡妻同安郡君文」では後添いの王閏之が「嗣いで兄弟と爲り、君の賢きに如くは莫し。婦職　既に修め、母儀　甚だ敦し」であったとやはり婦徳を備えていたと記述する。

次は妻の才学に高い評価を与えている点である。梅堯臣であれ、曾鞏であれ、彼らは女性の才知を非常に評価している。すでに…で言及したように、梅堯臣と蘇軾の文章では、申し合わせたように屏風の後ろに身を潜めて夫と客の間の会話を聴いている場面が登場する。

> 吾嘗て士大夫と語りしとき、謝氏は多く戸屏従(よ)り竊かにこれを聴き、間(ひま)あらば則ち尽く其の人の才能賢否及び時事の得失を商搉し、皆条理有り。
> 〔吾嘗與士大夫語、謝氏多從戸屏竊聽之、間則盡能商榷其人才能賢否及時事之得失、皆有條理。〕（歐陽修「南陽縣君謝氏墓志銘」）

> 軾客と外に言うに、君屏間に立ちてこれを聴き、退きては、必ず其の言を反覆して言いて曰く、某人は言えばすなわち両端を持し、惟だ子の意のみこれを嚮う。子何を用って是の人と言うやと。来たりて軾と親厚を求むること甚だしき者あり、君曰く、恐らくは久しうするころ能わざらん。其れ人に與(くみ)すること鋭ければ、其れ人を去ること必ずや速やかならんと。
> 〔軾與客言于外、君立屏間聽之、退必反覆其言曰、某人也、言輒持兩端、惟子意之所嚮、子何用與是人言。有來求與軾親厚甚者、君曰、恐不能久。其與人鋭、其去人必速。〕（蘇軾「亡妻王氏墓志銘」）

「南陽縣君謝氏墓志銘」は歐陽修が書いたものではあるが、墓誌銘のもととなった行状は梅堯臣が提供したものであったにちがいない。中原健二は『宋詞と言葉』[23]の中の、「「江城子」と梅堯臣の悼亡詩」の中で、蘇軾の「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」と梅堯臣の「戊子正月二十六日夜夢」を分析し、極めて類似している点があると述べた上で、

「梅堯臣に触れた東坡の文章のなかに直接その悼亡詩に言及したものはないが、東坡は梅堯臣の一連の悼亡詩を知っていたと考えてよいだろう」と指摘する。同時に「欧陽修が梅堯臣の求めに応じて、その妻謝氏の墓誌銘を書いているのであるが、そのなかに梅堯臣が語るかたちで、謝氏の生前の賢明さを示すエピソードが記されている。それがまた、東坡が通義君のために書いた墓誌銘の一節とよく似ているのである。このことも、悼亡をめぐっての東坡と梅堯臣とのつながりを思わせる」とも言っている。この他、清水茂の『唐宋八家文』[24]でも、この点に触れている。蘇軾の座師であった梅堯臣は、悼亡詩であれ墓誌銘であれ、蘇軾に対して大きな影響力を持っていたと言えるだろう。

同様に、曾鞏は妻の学才に関して次のように書いている。

> 文柔、姓は晁氏、諱は德儀、字は文柔、年十有八にして余に嫁す。…人と爲りは聰明、事に於いて迎見すれば立ちどころに解し、其の理を盡くさざる無し。其の概の見る可き者此の如し。
>
> 〔文柔姓晁氏、諱德儀、字文柔、年十有八嫁余……爲人聰明、于事迎見立解。無不盡其理、其概可見者如此。〕（曾鞏「亡妻宜興縣君文柔晁氏墓志銘」）

この三人の士大夫に描かれた妻たちは智慧の光に輝いており、彼女たちは高度の判断力、聡明さ、才知を具備していた。このような女性たちは、賢妻たりえただけでなく、良母の役割も果たしえたのである。

もちろん、梅堯臣や曾鞏と比較すると、蘇軾の妻に対する観念の新奇な点は一目瞭然である。まず曾鞏は長きにわたり儒教文化の伝統的な観念を受け入れてきたため、彼が妻の容貌を褒め称えるのは不可能であっただろう。また梅堯臣は「世間の婦を見盡くしたれども、美しく且つ賢きに如くは無し」（見盡人間婦、無如美且賢）と大胆率直に妻の美貌を讃美してはいるが、具体的な描写となると、探し出すことは出来ないのである。それに対して蘇軾はどうかと言うと、彼は妻妾たちの美貌を描き出すだけでなく、高雅で世間離れした、上品で穢れのない、内側からにじみ出るような自然美をも描き出したのである。

次に、蘇軾は仏教を妻を詠じた詩文に導入し、折々妻の冥福を祈った。蘇軾が妻を描いた作品、中でも妻を詠った詞が伝統的な女性を詠じた「閨闈の作」ジャンルに属することは疑いがない。伝統的な夫婦生活を主題にした詩詞は普通はかなり艶っぽい言葉遣いで描写をし、ある種の「脂粉の気」がただようものである。ところが、蘇軾が妻妾を詠じた詩にはそういった痕跡は皆無である。その原因の一つは、かなり荘厳な仏典の典

故や禅宗の思想を妻妾を詠じた詩文に導入したためであろう。蘇軾は俗っぽくなりがちな「閨闈の作」を仏典の色に染め上げることにより、別の次元にまで引き上げ、新たな文化的意義を付け加えたのであった。

終りに

一代の文豪蘇軾は、独特な方式で内心の世界を表現した。彼は宋代の士大夫が共有していた特徴を備えていただけでなく、生き生きした個性を有していた。詩人は思慮深くかつ愛情に富み、妻にせよ侍妾にせよ、一視同仁にわけへだてなく接した。現存する材料から観察すると、王弗を題材にした作品がもっとも少ないが、少ないからといって愛情が薄かったわけでも、愛情が欠如していたわけでもない。王弗の死後十年後に作られた「江城子・乙卯正月二十日夜記夢」がその証拠である。「小さな軒窗にて、正に梳妝す、相い顧みて言う無し、惟だ涙千行有り」〔小軒窗、正梳妝、相顧無言、惟有涙千行。〕ここに表現されているのは賢妻に対する無限の愛情である。この詞の中にある「處として淒涼を話す無し」という句は、この十年間に起こった事どもを、いったいどこから話したらよいのか、という蘇軾の亡妻に対する切実な問いかけである。ここに描かれているのはもちろん生活の小さな一コマに過ぎないのだが、亡妻の永遠の生命力がなんとくっきり顕れていることか。二十八年後、王閏之もまた、蘇軾に先立ってなくなってしまった。蘇軾は断腸の思いをこめて「亡妻同安郡君を祭る文」を作った。「我曰く、歸らん哉、行に丘園に返らんとすと。曾に少しも須たず、我を棄てて先んず。孰か我を門に迎え、孰か我に田に饋らん。已んぬる矣、奈何せん、涙盡きて目乾く。國門に旅殯し、我實に恩少し。惟だ同穴有り、尚 は此の言を蹈まん、嗚呼 哀しい哉。」〔我曰歸哉、行返丘園。曾不少須、棄我而先。孰迎我門、孰饋我田。已矣奈何、涙盡目乾。旅殯國門、我少實恩。惟有同穴、尚蹈此言、嗚呼哀哉。〕［「祭亡妻同安郡君文」］また、元符三年（一一〇〇年）に「戊寅歳上元に追和す」を作り、その詩の跋で、「又復た同安君を悼懐し、……君が亡するを悲しみ、子が存するを喜ぶなり」と述べ、王閏之に哀悼を表している。朝雲がまたもや彼に先立って亡くなった時には、「この會　我健やかなりと雖も、狂風　朝雲を卷く。我をして霜月の如く、孤光　天邊に掛らしむ」〔此會我雖健、狂風卷朝霞。使我如霜月、孤光掛天涯〕（「丙子重九二首」・一〇九六年作）と感慨を述べている。元符四年（一一〇一年）蘇軾が逝去するや、弟の蘇轍は兄の遺言通り、彼と王閏之を合葬し、「惟だ同穴有り」という宿願を果たさせた。蘇軾は三人の妻妾の誰に対しても、深く厚い愛情を抱いていたと言えるだろう。「三子は一の如く、愛は天より出ず」という彼の言葉

をもじれば、「三妻は一の如く、愛は天より出ず」とかれの妻妾たちに対する愛情を喩えることができるであろう。

蘇軾は特別な人生を送り、独特な日常生活の体験をし、そのことによって彼の女性観は時代を代表するものとなった。「蘇東坡のように活気に満ちあふれた人生を送った人物は、この世で唯一無二の存在である」/〔元氣淋漓富于生機的人，總是不容易理解的。像蘇東坡這樣的人物，是人間不可無一有二的。〕[25] は妻妾たちに対する深い気持ちを絶妙な筆端に載せて表現し、自分の理想の女性像を多彩な作品に融け込ませたのであった。人々の心を動かす妻妾を詠じた詩文の中で、くっきりした、個性的なイメージが紙上に躍っている。蘇軾が生活、思想、感情の三方面から行った妻妾たちの描写は、現実生活の基礎の上に妻妾のイメージを構築し、彼の進歩的な婚姻観を体現しており、同時に北宋士大夫たちの固有な妻に対する観念と、価値観を反映している。

注

1　伊佩霞『内閨・宋代的婚姻和婦女生活』（江蘇人民出版社　二〇〇四年刊）第七十頁。

2　同書六十頁。

3　（宋）姚勉著・（宋）姚龍起編『雪坡舍人集』（南昌：退廬　一九一六年刊）。

4　以下、蘇軾の詩文の引用はすべて『蘇軾全集校注』（張志烈・馬徳富・周裕鍇主編　河北人民出版社　二〇一〇年刊）による。

5　『都市文化研究』（納谷朝陽訳　二〇一〇年刊　十二号）第一二〇頁。

6　葉嘉瑩主編『蘇軾詞新釋輯評』（北京：中国書店　二〇〇七年刊）第四頁。

7　薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』(西安：三秦出版社　一九八八年刊)。

8　『大正新修大藏經』三十八巻（大正一切經刊行会）。

9　金開誠、董洪利、高路明著『屈原集校注』（北京：中華書局　一九九六年刊）。

10　林語堂著『蘇東坡傳』（上海　上海書店　一九八九年刊）第二二八頁。

11　同書八頁。

12　『人間社会學研究収録』（二〇一一年六号）（大阪府立大学大学院人間社会学研究科　二〇一一年二月刊）。

13　『漢書』の引用は中華書局排印本による。

14　（宋）趙令畤撰・孔凡禮點校『侯鯖録』（北京：中華書局　二〇〇二年刊）第一二〇頁。

15　鄒同慶、王宗堂著「蘇軾詞編年校註」（北京：中華書局　二〇〇二年刊）第七〇四頁。

16　林語堂著『蘇東坡傳』（上海　上海書店　一九八九年刊）第二二九頁。

17　（宋）蘇軾撰・王松齡點校『東坡志林』（北京：中華書局　一九八一年刊）巻十一。

18 『大正新脩大藏經』三十八巻（東京 : 大正一切經刊行會刊）。

19 曾棗莊、舒大剛主編『三蘇全書』（北京 : 語文出版社二〇〇一年刊）第一四四五頁。

20 『大正新脩大藏經』三十八巻（東京 : 大正一切經刊行會刊）。

21 林語堂著『蘇東坡傳』序言（上海：上海書店一九八九年刊）。

22 『人間社会学研究収録』（二〇一一年七号）（大阪府立大学大学院人間社会学研究科二〇一二年三月刊）。

23 中原健二『宋詞と言葉』（汲古書院　二〇〇九年刊）第一二二頁。

24 清水茂『唐宋八大家』（東京 : 朝日新聞社　一九六六年刊）。

25 林語堂著『蘇東坡傳』原序（上海：上海書店一九八九年刊）。